

# 明治時代の女子教育における刺繍について

中川 麻子\*・田中 淑江\*\*

The Embroidery Works of Girl's Education in Meiji Era

Asako NAKAGAWA\* and TANAKA Yoshie\*\*

## 抄 録

明治時代、刺繍分野は、新時代の女性自立のための新しい職業として期待され、女子教育の中に取り込まれていった。明治時代前期までは、慣習的な手芸教育が行われていたが、明治時代後期になると、女性の職業としての刺繍教育が始まり、さらに明治時代末期には、より専門的な職人もしくは作家のような人材育成が始まった。刺繍教育は、明治時代の女子教育に多大な影響を与え、またこの流れは大正時代へと受け継がれていった。

## Abstract

Embroidery was expected as an occupation for female independence and was added to the education of girls in Meiji era. Customary handicraft education was performed till the first half of Meiji Era. In the late Meiji Era, the embroidery education as a female occupation started. Furthermore, personnel training like a more special craftsman or an artist began in the end Meiji Era. Embroidery education had great influence on the education of girls and female independence of Meiji Era and this influence was inherited to Taisho Era.

キーワード：刺繍、裁縫、女子教育、明治時代、美術染織、共立女子職業学校、女子美術学校

## 1. はじめに

明治時代後期から末期にかけて、絵画を圖案にした大型の染織作品が盛んに制作されていた。その精緻な技と絵画のような様々

を驚嘆させ、国内外の万博で高く評価されていた。これらは「美術染織」と呼ばれる染織作品で、この時代の日本を代表する輸出品であり、また美術品でもあった(図1)。明治時代から大正時代にかけての美術染織分野の成立過程と、時代的経過、作品分類等は、

\* 情報コミュニケーション学部メディア学科、Tsukuba Gakuin University

\*\* 共立女子大学家政学部被服平面造形研究室、Kyoritsu Women's University

拙稿『美術染織－成立と構造－』において明らかにした<sup>1)</sup>。



図1 刺繍額《菊に鳩図》飯田新七、霞ヶ関離宮  
明治44年

美術染織作品は、綴織や天鷲絨友禅等の染織技法を用いて制作されたが、中でも、刺繍作品は海外での評価が高く、パリの有名メゾンや女優が買い求める等、一種のブームを起こしていた。また当時の染織分野の中心地でもあるイタリアでも絶賛され、作品が高値で取引されていた。

特に明治30年代における刺繍作品の品質の高さと、海外における評判は、日本の染織業界でも注目されており、海外向けの新しい産業として有望視された。

日本の刺繍分野が本格的な産業として勃興しようとする明治時代後期、刺繍分野は、新時代の女性自立を目指した新しい職業としても期待され、女子教育の中に取り込まれていった。また、近代教育を受けた女性による染織作品が、京都博覧会や海外万博において賞牌を得たほか、百貨店等で販売されることも多くあり、この時期の美術染織作品の発展に寄与しているといえる。さらに、こうした近代的な手芸教育の成果が、大正時代以降、新しい美術分野創出にもつながっていく重要な動きとなる。

それに関わらず、刺繍、編物、造花等のいわゆる手芸分野については、洋裁や他の工芸分野に比べると学術的価値が低くおかれ、研究が進んでいない。また、明治時代の女子

教育についての研究は、教育学の分野から行われているが、手芸教育についての研究は進んでいないのが現状である<sup>2)</sup>。

本稿は、手芸分野の刺繍に注目し、明治時代の女子教育に取り込まれ、新しい産業および美術分野へ発展していく様子を捉えることを目的としたものである。

## 2. 江戸時代末期から明治時代前期における刺繍教育

明治5年に学制が発令された。女子教育については、「女兒小学は尋常小学教科の外に女子の手芸を教ふ」として女子上等小学手芸科が設置された。しかし教授内容は「木綿反物丈カ中心得ノ事、運針ノ事、男襦袢、縮緬長襦袢、木綿唐機男物重物、木綿半纏、夜具、一重単衣」等であり、学科名称に「手芸」としているものの、内容は裁縫を中心としていた。

ほぼ同時期の明治3～8年頃には、都市部では民間の女子教育施設と、ミッション系の女子学校設立が相次ぎ、良家の子女を集めた近代女子教育が始まっていた。明治8年の跡見女子学校、明治9年の河村女校、明治9年の立教女学校、明治12年の同人社女学校等の開校がこれに当たる。ミッション系の私学は、キリスト教の布教を目的としたもので、聖書や英語等の科目の他に、裁縫、手芸の科目が置かれた。こうしたミッション系の私学は、良家の女子に向けた学校であったため、ここでの裁縫手芸教育は女性の嗜みとしての内容だったと考えられる。

その一方で、一般の裕福でない女子を対象とした教育機関としては、江戸時代から続く寺子屋、または「針小屋」と呼ばれる小さな私塾で行われていることが多かった。ここでは女性の師匠から、裁縫や小間物制作などの手ほどきを受けていた。こうした裁縫類は、女性の嗜みや趣味としてではなく、生活するた

めに必要最低限、女性が身につけておく技術として伝習されたものだった。

このように、明治時代初期においては、裕福な階級の女子には趣味や嗜みとして、また一般的な女子に対しては、家庭内の衣料制作を担うための生活の技術として教授されていた。

だが京都ではこれらとは異なる目的意識を持った、新しい女子教育が始まっていた。その1つは明治5年、京都府が英国人イーヴァンス夫妻を雇い入れて始めた新英学校及女紅場である。「女紅」（じょこう）とは、「女工、女巧」等、古くから使われてきた言葉であり、女性によって行われる手仕事のことを指す。しかし、明治時代の「女紅場」とは、女性による勸業推進という理念を持つ新しい教育施設であった<sup>3)</sup>。

新英学校及女紅場は、良家の子女を対象にしながら、女紅教育（手芸、裁縫）と師範教育（教師養成）を行い、良妻賢母育成と女性の職業訓練校の両面を担っていた点が、他校のミッション系女子学校と異なる。また、手芸には伝統的なものと、洋風のものが含まれていた。

当時の京都は、明治維新の影響によって西陣を中心とした染織業界が壊滅的な状況に陥っており、業界回復のために京都府と民間業者が躍起となっていた時期である。明治5年には京都から海外伝習生が派遣され、いち早く西欧の新技術と機械が持ち込まれ、新しい染織技術が生み出された。また新たな顧客の開拓のために、外国人向けの商品開発も盛んに行われていた。さらに地域経済の活性化を目指して、明治4年からは京都博覧会がほぼ毎年開催される等、京都が一丸となって経済発展に取り組んでいた。

新英学校及女紅場では、明治8年の京都博覧会、明治9年のフィラデルフィア万博等の海外万博にも、刺繍や造花、織物等の出品し褒状を得た。このことは、同校の技術が高い

水準に達していたことを示している。同時期に設立された女紅場において、洋風手芸が取り入れられたのは、京都の新しい産業として、輸出染織品の発展に貢献するためだったといえる。前述した他のミッション系女子学校や、裕福層の女子教育施設と異なるのは、単なる趣味や嗜み、女性の楽しみとしての裁縫手芸教育ではなく、実務としての装飾手芸教育が行われた点である。

また同じ京都では、もう1つの女紅場が設立された。これは、遊郭等で働く女性の自立を促すために、裁縫等の技術を教える職業訓練施設である。明治5年の人身売買禁止令を受けて設立された婦女職工引立会社によって、京都市内の花街に開設された。こうした女紅場は「遊女女紅場」または「正貞女紅場」と呼ばれ、明治6年の柳池女紅場設置の後、市内に相次いで開校した。指導内容には裁縫だけでなく、伝統的な手芸と洋風手芸が積極的に取り入れられた。この施設は、ある特定の女性に向けた職業訓練校という特殊な例ではあるが、明治時代後期の女性自立のための刺繍教育につながる流れとして、注目すべき教育機関である。

前述の新英学校及女紅場は、明治7年には英女学校及女紅場、明治9年に京都女学校及女紅場と改称を繰り返し、明治15年には、女紅場の名称を廃して、京都女学校と改称した。またこれと同時期に、他の正貞女紅場も閉校する。この動きは、明治20年代に向けて、より近代的な女子教育へと受け継がれていくことになる。

このように、明治時代前期においては、裁縫手芸教育は、主に良家向けの趣味や嗜み、一般の女性向けが家庭内の衣料を賄うための実用技術という、慣習的な内容が殆どであった。しかしその一方で、少数派ではあるが、女性が自立するための職業訓練、新しい輸出染織分野の創出という新しい流れも現れていた。

### 3. 明治時代中期から後期における手芸教育の充実

明治10年代になると、より高い水準の教育が求められ、都市部を中心に女子中等教育機関が次々と設立された。

明治15年には、高い知識と技術を持つ女性指導者の育成を目指して、女子師範学校附属高等女学校が設立された。同校では、裁縫手芸に関する教科が教育の中心に置かれた。この学校で手芸がカリキュラムに取り込まれたことは、ようやく慣習的な裁縫術の教授から脱し、近代的な手芸教育が始まったことを示している。

また民間では、裕福層の子女を対象としながらも、職業訓練の性格を持つ女子学校が開設されるようになる。早い例では、渡辺辰五郎が明治15年に和洋裁縫伝習所（現東京家政大学）を設立し、裁縫と手芸を教育の中心に据えた。

さらに明治19年には、共立女子職業学校（現共立女子大学）が「女子に適応する諸職業を授け広く餘の婦女子に実績を得しめんとするに在り」という目的を掲げて設立された。

学科課程には「裁縫」科、「編物」科に並んで「刺繍」科が設置された。『共立女子職業学校年報 第18、19年報』によれば、明治38年には、裁縫科375名、編物科186名、刺繍科111名、造花科78名、圖畫科28名と記録されている。また刺繍科については、次のように説明されている<sup>4)</sup>。

#### 「刺繍科

半襟、服紗、額面、掛物、「ハンカチーフ」等を始め諸種の布帛に人物、草木、花鳥、山水等を刺繍する技藝を授く本科に於ては下繪を描く技能を得せしめんが為め圖畫を兼修せしめ畫方の習熟とともに意匠圖案の力を練磨せんことを務む近年「ミシン」を以て刺繍の

一部に應用し成績大にみるべきものあり従前数十日を要せしものも僅か数時間にして製作し得るに至れり今後尚ほ熟練の功を積み益々其の應用を廣うすることを得ば技術上の便益増し鮮少ならざるべし此の科の製作品は海外輸出品として需要益増加を來し将来最も望を属すべきが如し」

共立女子職業学校

『共立女子職業学校二十五年史』明治44年

刺繍科では、人物、草木、花鳥等絵画を下繪に刺繍作品が制作された。また自分で下繪を描くことが重要視され、刺繍科に在籍する者は、特に図案の勉強をすることが奨励されていた。

刺繍科図案の指導には、東京美術学校、東京高等工業学校等の近代的な美術教育に携わる人物があたっていた。刺繍教育では特に新しい刺繍図案の創出に熱心に取り組み、刺繍技術の習得に止まらない発展的な教育が行われていた。

共立女子職業学校では、輸出用の刺繍作品の制作を念頭においてカリキュラムが組まれており、明治22～43年には、国内外の博覧会にも積極的に生徒作品を出品し賞牌をえている。またこうした功績が認められ、明治33年には三越呉服店より生徒作品販売の依頼も受けている<sup>5)</sup>。このように、共立女子職業学校は、作品制作や技術習得に止まらず、商品として市場に通用する刺繍作品の制作を目指し、高度な刺繍教育を行うことで、明治時代の女性自立を助け、新女性の育成に寄与した（図2）。

明治33年には女子美術学校（現女子美術大学）が、当時国内唯一の女子美術教育機関として設立された。設立趣旨には、女子に美術教育の機会を与え、女子師範学校等の女学校における美術教師の養成を掲げていた。本学の刺繍教育については、大崎綾子氏の研究が詳しい<sup>6)</sup>。開学当時の学科は、日本画、西

洋画、彫刻、蒔絵、編物、造花、刺繍の7学科が設けられ、美術科目の中に刺繍がひとつの独立した項目として挙げられた。大正4年には文部省より、刺繍科と造花科の高等師範科卒業生に、手芸科中等教員無試験検定の資格が与えられ、同校は教員養成に力を入れるとともに、優れた刺繍作品を多数制作した。

明治10年代後半から始まった女子中等教育機関においては、手芸が近代教育の一環として取り入れられただけでなく、女性の嗜みとしての裁縫手芸という性格は弱まり、職業訓練の刺繍という意識が強まった。これは当時の刺繍産業の景況と、女性の新しい職業としての刺繍分野に対する期待を反映したものといえる。



図2 共立女子職業学校学生作品、大正10年

#### 4. 美術としての刺繍

明治時代後期に充実した女子教育機関における刺繍教育では、やがてより高い価値を持つ刺繍作品の創出へと変化していく。

当時、海外万博には絵画のような図案を精緻に表現した美術染織作品が出品され、高い評価を得ていたことは前述の通りである。こうした作品は、専ら京都の有力な業者が出品したもので、いずれも高名な画家が図案を描き、鍛錬を積んだ職人の団体作業によって作られていた。美技を極めた高レベルの美術染織作品は、海外でも常に注目を集めていた。

しかし明治30年代以降、海外万博への美

術染織作品の出品は過渡期を迎える。それまで万博への出品および作品選考の主導権を握っていた京都の有力な染織業者が、賞牌の関係ない自営出品に力を入れるようになった。そのため、コンクールへの主な出品者は、中規模の業者や個人の職人に移っていく。個人の職人は、図案から制作までを一人ないしは少人数によって行っていた。また明治30年のパリ万博から「美術的」を高めるために、出品者（業者）と制作者（職人）を分けて明記し、さらに賞牌もそれぞれの氏名で授与されるようになったことも、この傾向を強めた。

共立女子職業学校および女子美術学校から、万博出品に際しては、画家が描いた図案を用いる等、同時期の美術刺繍作品に強い影響を受けている。しかしカリキュラムでは、図案も刺繍も同じ者が行うように指導されていた。これは、女性が刺繍を職業とし生計を立てるには、企画から制作までをひとりで行うほうが望ましいといった自立のための配慮と、一人で行うことが、作品の美術的価値を高めると考えられたためである。

共立女子職業学校では、刺繍だけでなく、図案を自ら描けるように、図案の科目が必修であり、自分で写生した絵を刺繍の下絵にすることもあった。近代的な教育を受けた女子学生が描くのは、伝統的な日本画の手法にのっとったものではなく、新しい感性で描かれた自由な絵画であった。新しい図案をいきいきと表現するために、新しい感覚の繡法の開発は不可欠であった。女子美術学校では江戸時代までの伝統刺繍でもなく、また明治維新後に移入された西欧刺繍の技法だけでなく、後に「女子美刺しゅう」と呼ばれる新しい刺繍ステッチが次々と開発され、新しい表現が進められていく。

明治40年に梶山彬によって出版された『女性技藝刺繡術新書』には、刺繍と絵画、図案の関係について次のように述べている<sup>7)</sup>。

### 「第三章 刺繍と絵画の関係

…(刺繍は)すなはち絵画と天然との中間を写して之を美化するを以て本旨となすなり、(中略)然れば斯の術を修めんとする者は、縦ひ精巧の絵画を描くこと能はざるまでも、普通簡易の絵画は、之を描き能ふだけの心得なかるべからざるなり(中略)必ず多少絵画の素地を築くを怠るべからず、蓋し刺繍と絵画とは、鳥の両翼の如し、また影の形ちに随ふが如し、未だ曾て其の一を缺いて可ならざるなり」

梶山彬著『女性技藝刺繍術新書』明治40年

つまり、刺繍を生業とする者は、絵画の学習を行わなければならない、刺繍と絵画は「鳥の両翼」または「影と形」のように、どちらが欠けてもならないものである、と説いている。

同書は「全国高等女学校美術技芸女学校参考書」と銘打たれたものである。本文中で、「本書は諸種の女学校に於いて斯の技藝を教授せんと欲するに際り、一面は以て教師の参考に資すべく、一面は以て学制の階梯に供せしめんが為に編纂せるものなれば、即ち斯の術の教本なり」と述べている通り、中等教育以上の女子学校に向けた刺繍のテキストである。刺繍をする際の姿勢、用具の選び方、刺繍技法の解説、図案特に植物の図案と刺繍表現を詳しく紹介している教科書であり、当時の刺繍教育分野で広く読まれていたと考えられる。

本書からも、当時、女子教育機関で制作された刺繍作品は、同時代の美術染織作品のような絵画的な図案を表現していた一方で、従来のような分業制作の作品ではなく、図案から制作までを一人で行う刺繍、つまり現在という芸術家や作家のような制作形態が推奨されていたことが分かる。

このように明治時代末期、女子教育機関における刺繍教育は、それまでの単なる技術の

習得や職業婦人としての鍛錬ではなく、美術作品の制作者としての女性育成を強く意識したものに變化したことが明らかになった。

## 5. まとめ

明治時代初期から始まった近代的な女子教育の中で、裁縫手芸教育、そのうち特に刺繍がどのようにカリキュラムに取り入れられ、教授されていったのか、その様子を見てきた。明治時代前期までは、女性のための嗜み、または家庭内における針仕事という、慣習的な裁縫手芸教育が主なものだった。しかし、明治時代中期から後期にかけては、裁縫手芸教育が充実し、職業訓練としての性格が強まった。その1つは指導者育成を目的としたもの、もう1つは作品制作者となり生計を立てるといふ、2通りの目的があった。

さらに明治時代末期から大正時代にかけては、刺繍教育は単なる技術の習得に止まらず、図案の描画から作品制作等を一人で行う、職人もしくは作家のような人材育成も行われていたことが明らかになった。これは、明治時代において、刺繍は新時代の生きる女性が、高い技術と文化的教養を発揮できる新しい職業として期待されていたことを示している。

明治時代の女子教育を通じて、新しい刺繍表現が創出され、大正時代に新たな美術分野としての刺繍分野と、家政教育の発展に寄与することとなる。このことについては、次稿で取り上げたい。

### 注

- 1) 中川麻子「美術染織－成立と構造－」博士論文、国立女子大学、平成24年
- 2) 近代教育初期の手芸教育については、桜井映央子「近代学校成立期における手芸教育」和洋女子大学大学紀要、和洋女子大学、昭和43年、51-64頁。および桜井映央子「明治後期女子中等学校における手芸教育の制度ならびに教材に関する研究」和洋女子大学大学紀要、

和洋女子大学、1978年、1-20頁等があるが、あまり多くはなされていない。

- 3) 坂本清泉「女紅場の研究－京都女学校及女紅場を中心として－」『大分大学教育学部研究紀要 教育科学』4号、大分大学教育学部、昭和48年、15-32頁。
- 4) 共立女子職業学校『共立女子職業学校二十五年史』明治44年及び共立女子職業学校『共立女子職業学校年報 第18、19年報』
- 5) 共立女子職業学校『私立共立女子職業学校年報 第26年報』大正2年
- 6) 大崎綾子「女子美術学校の刺繍教育－明治、大正期を中心に－」『女子美術大学研究紀要』第39号、女子美術大学、平成21年、10～20頁。
- 7) 梶山彬『女性技藝刺繍術新書』廣文堂書店、明治40年

